

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月7日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22650216

研究課題名（和文） 社寺建築の年代判定のための細部意匠変化に関する指標の構築

研究課題名（英文） Creating indicators of detail design changes for the building age determination of Japanese traditional architecture

## 研究代表者

三浦 正幸 (MIURA MASAYUKI)

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：80136134

研究成果の概要（和文）： 建築細部意匠による建築年代の判定技術を科学的な水準にまで高めることを目的として、簡易な練習を積んだ者なら普遍的に容易に即座に建築年代判定が正しく行える判定指標を提示することが最終的目的であった。本研究では、臺股と木鼻に限定し、13世紀から16世紀までの概ね中世の範囲で、京都・奈良などの中央とそれ以外の地方との差異を考慮して、完全なる年代判定指標と編年図を作成することができた。

研究成果の概要（英文）： I present a method for determining by the shape of the details in order to know the age of wooden traditional architecture of Japan. I have created an index to get to know the age of the building. In this study, for the wood ends (*kibana*) and frog legs (*kaerumata*), from the 13th century till the 16th century (in the range of the Middle Ages roughly), taking into account of the differences between central district such as Kyoto, Nara and local district, I have created the determination index on building age.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	300,000	0	300,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	240,000	1,340,000

研究分野：日本建築史

科研費の分科・細目：文化財科学・文化財科学

キーワード：社寺建築・古建築・日本建築・臺股・木鼻・建築年代・年代判定・文化財

### 1. 研究開始当初の背景

建築年代を正確に判定できる研究者は、全国でも極めて少なく、古建築を専門とする研究者であっても、その多くは建築年代の正しい判定ができないのが現状である。専門の研究者にしか行えなかった古建築の年代判定を、一般人が容易に行えるような科学的技術として普及させる必要性が文化財保存のために必要とされた。

### 2. 研究の目的

伝統的な木造の社寺建築について、その建築年代の判定を、建築細部意匠に基づく目視を主体とした観察により、専門の研究者でない文化財実務担当者などが正確にかつ容易に行うための指標を構築することを研究目的とする。さらには、日本の社寺建築と共通性の高い中国・韓国・ベトナムの古建築についても拡大できるものである。そのうちで、本研究は建築部材の一部である臺股と木鼻だけについての指標を中世（13世紀～16世紀）の範囲で構築する。

時代限定の理由は、古代（12世紀以前）のものは現存例が少なく、判定指標の作成の意義が低いこと、近世（17世紀以降）については、研究代表者がすでに虹梁の絵様による判定指標を提唱しているからである（三浦正幸、広島県教育委員会、広島県の近世社寺建築、1982、pp.276-277、三浦正幸、至文堂、日本の美術201江戸建築、1983、巻末鑑賞の手引き）。

### 3. 研究の方法

本研究は、申請者がすでに収集蓄積している膨大な量の社寺建築（重要文化財指定建造物のほぼ全数）の細部写真15万枚および重要文化財建造物の保存図などを研究資料として用い、その中から臺股および木鼻に限定して分析考察を行い、年代判定指標を構築するものである。したがって、研究の計画・方法は、資料分析と指標構築という机上作業を中心とした単純なものである。

### 4. 研究成果

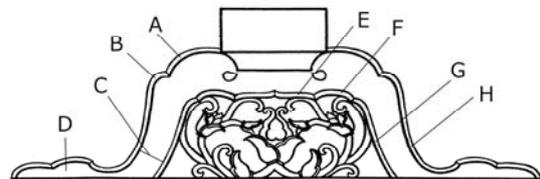
(1) 臺股は本臺股と板臺股の2種類があり、その両者について年代判定の指標を作成した。本臺股の年代変化を基準とし、板臺股については、その基準が応用できる。

(2) 本臺股については、これまでは、内部の彫刻の発達、足下の肥大化、斗尻に接して削られている目玉の消失などが年代判定指標とされていたが、それだけでは鎌倉時代・南北朝時代・室町時代・桃山江戸時代といった大ざっぱな年代判定しかできなかった。本研究では、内部彫刻・目玉以外に8か所の判定部位を設定し、各部位の変化発展を総合して年代判定をする指標を制作した。

なお、内部の彫刻については、現状で欠失・欠損している事例や彫刻が後補である事例が少なからずあり、それが原因となって重要文化財建造物の年代判定に誤りを生じていると考えられる事例も確認された。彫刻の発展程度からは、一般人では年代判定誤差が1世紀以上と大きくなったので、指標からは外すこととした。目玉は主旨15世紀までの臺股のほぼ総て（全数ではない）に存するので、16世紀末になっても遺存する事例もあるので、中世の臺股を見落とさない指標のひとつとした。

(3) 作成した年代判定指標は多くの図を主体としたものであって、図を使って年代判定を視覚的に行うものであるが、それをここに挙げるのは困難であるので、簡単な概念図を用いて判定の概略を文字で説明しておく。8か所の判定部位は次の通りである。

- A：肩の第1筆目曲線
- B：肩の第2筆目曲線
- C：脚の太さの相違
- D：足下の比例的大きさ
- E：内刳の第1筆目曲線
- F：内刳の第2筆目曲線
- G：内刳の面取・欠眉の有無
- H：鎬の有無



本臺股の概念図

(4) A：肩の第1筆目曲線とB：肩の第2筆目曲線の大きさの比例と曲線の形状

13世紀の前期においては、Aは上向きの半円に近い曲線であり、BはAの端部にできた小さな入り隅であったが、年代の下降とともに、Bが円に近い曲線に成長し、特に15世紀以降はそれが顕著となる。Aは次第に縮小して、16世紀にはAとBが同じぐらいの大きさとなる。なお、17世紀以降では、BのほうがAよりも大きい例が増える。13世紀では、Aは円弧が標準であったが、15世紀

から扁平になり始め、16世紀になると円弧の例は一般的には消滅する。

(5) B：肩の第2筆目曲線の特異な形状

14世紀では、Bはまだ小さく、入り隅のような形状に近いが、14世紀前期には、Bがほぼ水平に出る特異な形状が流行し、中期になるとその出が大きくなった。

(6) C：脚の太さの相違

脚は上部が太く、足首へかけて細くなるのが13世紀以降の形式であるが、15世紀になるとその差異が減少し、16世紀にはほぼ均一になる。なお、17世紀以降では、太さが上下逆になる例も少なくない。

(7) D：足下の比例的大きさ

足下は時代の変遷とともに大きくなる。15世紀にはかなり大きくなり、16世紀には極端に大きい例も現れる。また14世紀前期から中期には、足下に大きく入る切り込みを施す例がある。16世紀以降には足下の先端を若葉とする例が流行する。

(8) E：内割の第1筆目曲線

13世紀から14世紀にかけては、第1筆目が第2筆目より長く、かつ直線的であるが、15世紀以降になると両者は同じぐらいの長さとなり、第1筆目は直線部分のない反転曲線となる。16世紀以降はそれが顕著となる。

(9) F：内割の第2筆目曲線

13世紀では第2筆目曲線のない例がある。16世紀には上方へ大きく半円が飛び出す特異な例が流行する。

(10) G：内割の面取・欠眉の有無

14世紀から面取をする例が流行し、16世紀には欠眉とする例が流行する。

(11) H：鏝の有無

14世紀から鏝が流行する。

(12) 板臺股の年代変化は、本臺股の外形の変化とほぼ一致するが、足下については、2種類のものに分かれる。中備に使われる成の低い板臺股は本臺股と同じ足下となる。その一方、四脚門など棟木を受ける成の高い板臺股は、足下に反転曲線を加えず、斜めに切り放すのが一般的である。16世紀以降には、本臺股と同じ足下を付ける例が流行する。14世紀から目玉を渦巻（唐草）とする例が少なくなく、16世紀以降はそれが普遍化する。また成の低い板臺股では、14世紀前期から中期には、肩の第2筆目曲線に大きく入る切り込みを施す例がある。これは本臺股の足下

と同系統の曲線である。

(13) 木鼻の変化については、13世紀は総て天竺様系の木鼻（大仏様とされる木鼻は天竺様木鼻の一部にしか過ぎない）であるが、14世紀からは唐様木鼻が始まり、天竺様木鼻は次第に用例が減少する。唐様木鼻は、14世紀以降に流行するので、中央と地方の差というよりも、関東地方と瀬戸内地方との相違が顕著である。

(14) 唐様木鼻の年代判定は、中世と近世の区別から始める。中世の木鼻は円弧と等角螺旋による渦巻になるが、近世の木鼻はフリーハンド（筆の勢いによる手書き曲線）による曲線であって、おおむね放物線の一部となる。渦巻きの先端に明確な玉が生じるのは、17世紀中期以降である。また、渦巻きに若葉を添えるのは、17世紀後期からである。なお、天竺様系木鼻も、曲線の性質に関しては唐様木鼻に準じる。

(15) 中世の唐様木鼻の年代判定は、臺股と比べて曲線の構成要素が少ないこと、臺股ほど大きな年代変化がないこと、地方差が大きいことなどにより、一般人にも容易な判定基準の作成は困難と認められた。したがって、曲線の中世と近世の区別を行った上で、関東地方と瀬戸内地方別の編年図を作り、類似するものと同年代と判定する方法を提示する。

(16) 研究成果の公表については、社寺建築の細部意匠に関する教養書として執筆出版する予定である。なお、後掲する既刊図書は、本研究に基づく建築年代の修正の成果を盛り込んだものである。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計2件）

① 三浦正幸、吉川弘文館、神社の本殿—建築にみる神の空間、2013、239

② 三浦正幸、南々社、平清盛と宮島、2011、175

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三浦 正幸 (MIURA MASAYUKI)  
広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：80136134

(2) 研究分担者

なし ( )  
研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ( )  
研究者番号：